

中国仏教における護国思想の受容過程について

水 野 莊 平

一 問題の所在

護国思想という用語は、仏教と国家や国王が関係する場面において幅広く使われており、その内容を一律に定義することは困難であるが、いずれも仏法によって国家ないし国王が守護されるという意味が基本となっている。

この仏法によって国家ないし国王が守護されるという護国思想の起源については、種々の災厄をもたらす悪神を遠ざけて国の患いを消し民衆を守護するという、インド仏教の思想に由来することが明らかにされている。⁽¹⁾

従って、このようにインド仏教における護国思想は、悪神によって引き起こされる様々な災厄から仏法の力によって国が守られるとする「護国土」の思想であるが、これが中国仏教における護国思想になると、端的に言えばこの護国土の思想から、守護の主体が国王に絞られる「護国王」の思想へと変化するとともにその特色が見出されてきた。例えば唐の般

若訳の諸經典では、原典にはない国王守護の要素を訳出の段階で積極的に導入している。⁽²⁾

中国における護国思想については、特に密教の立場から、主としてこのような王権との関連をもつて考察されてきたが、そもそも護国思想はインドにおいて護国土の思想であったことを鑑みれば、王権との関連のみならず、先ず中国伝来当初の護国土の思想が中国においてどのように受容されていたのかも検討されねばならない。そして、中国における護国思想の受容過程を最も具体的に記されていると考えられるのが、護国三部經の一つとして知られる『仁王般若經』である。

『仁王般若經』は『大正藏』に鳩摩羅什訳『仁王般若波羅蜜經』二卷と唐の不空訳『仁王護国般若波羅蜜多經』二卷とが収蔵されているが、不空訳は羅什訳を改訂したものと考えられ、そして羅什訳とされる一本は五世紀後半に中国において成立したと推定される經典である。この羅什に仮託された

中国仏教における護国思想の受容過程について（水野）

一本は、インド伝来の經典を取り入れながらも中国において大きく増広されたという編纂過程を経ているため、各品ごとに様々な護国思想を見ることができ⁽³⁾る。

本稿では『仁王般若經』に収録されている様々な護国思想に関する記述を検討することにより、王権との関連も踏まえながら、中国における護国思想の受容過程を考察する。

二 『仁王般若經』各品の護国思想

『仁王般若經』は上下の二巻、八品から構成されているが、このうち護国について説かれているのは、上巻の二諦品第四、下巻の護国品第五、受持品第七、囑累品第八においてである。以下、それぞれの品ごとに検討する。

（一）二諦品

二諦品で護国について説かれるのは最末尾においてである。二諦品は上巻の最後であるから、『仁王般若經』の上巻で般若波羅蜜について説示された後に、その締めくくりとして般若波羅蜜の勸持功德が説かれる箇所、護国の功德が説かれているわけである。

ここでは「是の經にまた無量の功德有り。名づけて護国土の功德と為す。」（大正八、八三九下）などとして、『仁王般若經』を受持すれば護国土の功德があつて、国王や一切衆生が護られることが、ごく簡単に説かれている。經典の受持・読誦に

よつて何がしかの功德が得られるという教説は他經にも頻出するものである。

（二）護国品

下巻の護国品第五では、品名の通り終始一貫して護国思想が説かれている。先ず冒頭で「百の和香を焼き、百種の色花を以て用いて三寶を供養し」（大正八、八三〇上）などとして般若波羅蜜を受持する法式を述べ、そして「國土亂る時は先ず鬼神亂る。鬼神亂るるが故に萬民亂る。賊來りて國を劫し百姓亡喪して臣君太子王子百官共に是非を生ず。天地怪異にして二十八宿星道も日月も時を失し度を失し、多く賊起る」と有り。大王。若し火難水難風難一切の諸難あらば、またまさに此經を講讀すべし。」（大正八、八三〇上）として、国の乱れである鬼神がこの經を聞くことを願うことにより國土が護られるということ、更に國土の乱れの様子が描写されている。そして続いて般若波羅蜜を読誦することによつて難を逃れたという頂生王と普明王の説話が説かれる。

この護国品で説かれる内容は、最後の頂生王と普明王の説話を除けば、何れも『金光明經』の中に見出される。『金光明經』は北涼の曇無讖の訳で、『仁王般若經』と同じく護国三部經の一つとして知られる經典である。この『金光明經』の四天王品第六において、「まさに第一微妙の最勝宮宅を莊嚴し、種種の香汁を持って用いて地に灑ぎ、種種の華を大法

座師子之座に敷して散ずべし。」(大正十六、三四二上)などとして経を受持読誦する法式が述べられ、或いは経が受持読誦されれば四天王と鬼神によつて国土が守護されることが述べられ、また、

我等諸王及び諸鬼神既に捨離し已り、其の國まさに種種災異有るべし。一切人民、善心を失ひ、ただ繫縛瞋恚鬪諍有りて、互いに相破壊し諸の疾疫多し。彗星現怪し、流星崩落す。五星諸宿、常の度を違失す。兩日並び現われ日月薄蝕す。白黒惡虹數數出現す。大地震動し大音聲を發す。暴風惡雨、日に有らざる無し。穀米勇貴し饑饉して凍餓す。多く他方に怨賊の其國を侵掠する有り。人民多く苦惱を受く。其地、愛樂する處有るべく無し。(大正十六、三四三下)

などとして、国土の乱れも詳しく描写されている。即ち『仁王般若經』護国品における記述は、『金光明經』四天王品の記述とほぼ合致することから、『仁王般若經』護国品は『金光明經』四天王品を踏襲して作成されたものと考えられる。従つて、この護国品で説かれる護国思想も、インドのものと思ふ見なし得るであろう。

(三) 受持品

受持品第七では、前半で十三の觀門を修行する法師について説かれ、後半で般若波羅蜜を受持する護国の功德について説かれる。特に受持品後半の冒頭において、護国のために般若波羅蜜を受持することは「この故に諸の國王に付囑して比

中国仏教における護国思想の受容過程について(水野)

丘比丘尼清信男清信女に付囑せず」(大正八、八三二中)として、國王の専有事であることを明瞭に示している。これは護国思想が国土の守護から國王守護へと変容していくことを考える上で特筆される。

続いて、国土の七難、また五大力菩薩による国土の守護が説かれ、この経が付囑される十六大国の王の国名が説かれているが、とりわけ詳細に説示されるのが国土の七難についてである。ここでは、

天地國土は亢陽として炎火洞燃たり。百草亢旱して五穀登らず。土地赫然として萬姓滅盡す。是の如き變の時、また此經を讀せよ。六の難と爲すなり。四方より賊來りて國を侵し、内外に賊起り、火賊水賊風賊鬼賊ありて、百姓荒亂し刀兵劫起る。是の如き怪の時、また此經を讀せよ。七の難と爲すなり。(大正八、八三二下)

などとして、日月変怪・諸星変現・火難・時節反逆・風難・旱難・賊難の七難について「是の如き怪の時、また此經を讀せよ。七の難と爲すなり。」という定型句を繰り返して述べている。

このような災厄の記述は、その内容自体は前述の通り『金光明經』にも「多く他方に怨賊の其國を侵掠する有り。人民多く苦惱を受く。」などとして出ていたものであった。しかし『仁王般若經』と同じく五世紀後半成立の道教經典である『靈寶無量度人上品妙經』にも、「星宿は錯度して日月は失昏

中国仏教における護国思想の受容過程について（水野）

す。また当に齋を修し香を行じ経を誦すべし。四時は失度して陰陽不調なり。また当に齋を修し香を行じ経を誦すべし。」「**『道蔵』**一、一、十四）として、『**仁王般若経**』とほぼ同様の災厄の内容と表現が見られる。この『**靈宝無量度人上品妙経**』に記されるのは、世界の破局を予言する道教的な終末思想であり、その淵源は紀元前後の讖緯説に見出される。讖緯説とは讖が未来の吉凶の前兆を記した予言書、緯が儒家の経書を神秘主義的に解釈した予言書のことをいい、要は未来を記した予言書のこと、特に世界の破局に関する予言がしばしば見られる。『**仁王般若経**』が成立した南北朝代はこうした道教の終末思想が非常に流行しており、『**仁王般若経**』など中国撰述の仏教經典に説かれる災厄の記述も、この道教的終末思想の影響が推測される。⁽⁴⁾即ち、災厄の表現に詳しい護国思想が中国仏教に受容された背景として、南北朝時代の終末思想の流行が考えられる。

なお、受持品の冒頭では「爾時月光、心に念じ口に言さく」（大正八、八三二上）として、唐突に「月光」という名が使われており、これは月光童子信仰の影響が窺われる。この月光童子信仰とは、『**月光童子経**』『**申日経**』などに説かれる「外道に唆されて仏陀を排斥しようとする長者申日を、息子の月光童子が諫め、家族挙って仏陀に帰依する」という説話に登場する月光童子が、中国において未来の救世主として信仰され

るようになったものである。月光童子を未来の救世主とする記録の最も早い例は『**申日経**』の末尾に中国において加筆されたと考えられる一文で、「月光童子、まさに秦國に出でて聖君となり、我が経法を受けて道化を興隆せん。」（大正十四、八一九中）とある。また五世紀末の中国撰述經典と考えられる『**法滅尽経**』と『**般泥洹後比丘世變化経**』には、法滅の時、また世界の破滅の時、月光が五十二年（五十一年）のあいだ世に出て教えを復興させ、その後世界は再び破滅に向かい仏法も廃絶し、数千万歳を経て弥勒が仏となって現れて世界を救済することが説かれている。或いは六世紀初めの中国撰述經典と考えられる『**首羅比丘経**』では、末世の時、月光童子が出現し、大災害で苦しむ人々を救済するありさまが説かれる。北魏の熙平元年（五一六）には月光童子を称する少年による劉景暉の乱が勃発しており、月光童子信仰がいかに民間まで一般に浸透していたかが窺われる。

このように南北朝時代には、讖緯説からの影響で終末思想が流行し、仏教においてそれは法滅の思想、即ち末法思想と結びつき、更に月光童子信仰として大いに流行した。護国思想を説く受持品において突然「月光」の名が出ることは、護国思想と終末思想が密接な関係にあったことの証左と考えられる。

（四）囑累品

囑累品第八は『**仁王般若経**』の末尾の品であり、先の受持

品に引き続き護国思想が説かれるが、しかしこの囑累品の記述は、受持品とは全く趣きを異にし、仏の滅後に国王などの為政者がいかに仏法を弾圧するかが説かれ、それによって災厄がおこり国が滅びることが主張される。例えば「国王大臣太子王子、自ら高貴を恃んで吾法を滅破し、明に制法を作りて我弟子比丘比丘尼を制し、出家し道を行ずるをゆるさず、また仏像の形、仏塔の形を造作するをゆるさず。」（大正八、八三三中）などあって、これらはいずれも北魏太武帝の廃仏後の仏教統制政策、即ち僧官制度の制定、僧尼の戸籍への編入、私寺造立の禁止、などを批判した内容と考えられる。このように災厄の責を国王の悪政に帰せる例は、中国の天人相関説をはじめとして世界中に見られ、古代インドでも確認されるが、単に災厄の責を国王の悪政に帰せるだけでなく、悪政の内容を具体的に示して痛烈に批判している点に『仁王般若経』囑累品の特色がある。但し国王を批判しているとはいえ、インド伝来の護国思想よりも為政者である国王に焦点が絞られた内容となっている。そしてまた『仁王般若経』囑累品の著された五世紀後半以降は、国王を主体として国王守護を説く護国經典が著されている。

最後に、囑累品の末尾、即ち『仁王般若経』の最末尾には、「爾時無量の大衆中に百億の菩薩あり、彌勒師子月等」（大正八、八三四上）とあって、彌勒と師子月の名が見える。師子月

中国仏教における護国思想の受容過程について（水野）

は『師子月仏本生経』によれば、仏弟子の婆須蜜多のことで、彌勒に次いで仏となることが授記されている。従って、彌勒の前に世に現れて衆生を救済するという月光童子との同一性が想像され、月光童子信仰の祖形かと推測されるが、そもそも月光童子がどのようなにして『申日経』の付記にあるように救世主とみなされるに至ったのかは不明であるから、むしろこの師子月は中国における月光童子信仰の起源を考察する上で注目されるであろう。何れにせよ、『仁王般若経』の末尾に彌勒と師子月の名が出ることは、受持品の月光と同じく、護国思想と終末思想が密接な関係にあったことの証左と考えられる。

三 まとめ

以上、『仁王般若経』に収録されている様々な護国思想に関する記述を検討し、中国における護国思想の受容過程について考察を行った。それぞれの決要として、以下の点が挙げられる。

- ・護国品に説かれる内容は何れも『金光明経』の中に見出される。
- ・受持品において、護国のために般若波羅蜜を受持することとは国王に付囑され、国王専有事であることが明瞭に示される。

中国仏教における護国思想の受容過程について（水野）

・受持品に説かれる災厄の内容は『金光明經』の中に見出されるものの、その内容・表現は終末思想を説く道教經典のそれとも近似し、護国思想における南北朝期の終末思想の影響が推測される。

・受持品には南北朝時代に流行した終末思想の一つである月光童子信仰の月光の名が出、囑累品には月光童子信仰の祖形と推測される師子月の名が出る。

・囑累品は北魏の仏教統制政策を痛烈に批判しており、インド伝来の護国思想よりも為政者に焦点が絞られた内容となっている。

そしてこれらの決要を踏まえた上で、本稿の結論として、中国における護国思想の受容過程についてまとめると、

(一) 護国品に説かれるような護国思想の基本的な構成は何れも『金光明經』の中に見出されるインド起源の思想であるが、国土ではなく国王に焦点が絞られてゆく中国的護国思想の特色は、般若波羅蜜の受持を国王に付属される受持品や、国王の仏教統制政策を批判する囑累品において、その萌芽が確認される。

(二) 護国品や受持品に説かれる国土の災厄に関する記述は『金光明經』の中にも見出されるが、その内容や表現は終末思想を説く道教經典と近似し、また受持品に「月光」、囑累品に「師子月」の名が出ることから、災厄

の表現に詳しい護国思想が中国仏教に受容された背景として、南北朝時代における終末思想の流行があった。という二点が明らかとなった。

従って、中国における護国思想の受容過程としては、先ず終末論の流行していた南北朝代に、国土の災厄を説く護国經典がその終末論的色彩において受容され、やがて災厄からの国土の守護から国土を治める為政者に関心が向けられ、国王守護の護国思想へと変容していったと考えられる。

- 1 松永有慶「護国思想の起源」『印度学仏教学研究』十五一、一九六六年、六九―七八頁。
- 2 頼富本宏「中国密教の思想的特質」『中国密教』（シリーズ密教3）、一九九九年、春秋社、一三四頁。
- 3 拙稿「『仁王般若經』の成立過程について」『東海仏教』五三三号、二〇〇八年、三一―四八頁。
- 4 菊池章太「道教の終末思想」『道教と中国思想』講座道教4、雄山閣出版、二〇〇〇年、八四―一〇九頁。
- 5 山崎元一「古代インドの王権と宗教」、『刀水書房、一九九四年、九―二三頁。

〈キーワード〉 護国思想、『仁王般若經』、讖緯説、末法思想、月光童子

（愛知学院大学大学院研究員）